第43回新潟内分泌代謝同好会

日　時　昭和60年7月6日（土）
午後2時開会
会　場　新潟厚生年金会館

一　般　演　題

1．正常プロラクチン血症性無排卵症に対する CB 154 の投与効果

佐藤　芳昭・広橋　武
荒川　修・西村　満
丸山　晋司・阿久津　正
三宅　崇雄
（新潟大学産婦人科）

dopamin が gonadotropin 分泌の調節因子として働いていることが明らかになりつつある．今回は高プロラクチン血症を併なわない無排卵症のうち，clomiphen citrate に反応しない症例に対して，dopamin agonist である CB 154 を投与して，その排卵誘発効果をみた．

対象は clomid の2段投与で排卵のみられない正常プロラクチン血症31例であり，全て不妊を主訴とする無排卵性周期症12例，無月経Ⅰ度15例，Ⅱ度3例である．CB 154 による排卵誘発効果は，CB 154 単独で38.7%，clomid 併用で9.7%であり，無効は38.7%であった．前後の basal hormone 値では LH がより高い群には排卵しない傾向がみられた．

以上より CB 154 の投与は高プロラクチン血症でなくとも，その gonadotropin 分泌と pulsatility の改善に役立つようである．

2．クッシング病の1例

岩崎　洋一・奈良　芳則（燕労災病院内　科）
横山　元晴　（　同　脳外科）

症例は44才の主婦．数年前より顔面の腫張に気付き近医で高血圧性心不全の治療を受けていたが改善せず，本年4月当科受診し Cushing 症候群の疑いで精査の為入院した．現症では著明な高血圧症と満月様顔貌を伴った中心性肥満を認めたものの皮膚線条や多毛傾向は無かった．一般検査成績では特記すべき異常なく糖負荷試験での血糖曲線は糖尿病型で，IRI は遅延高反応を示した．ホルモン検査では日内変動で午前8時の cortisol 26.7 μg/dl，ACTH 70.7 pg/ml，午後10時の前者 18.1μg/dl，後者 32.3pg/ml であった．尿中 17OHCS は基礎値が 10～23.5mg/日で，8mg/日の DXM 負荷でそれの約50%に抑制された．更に SU 試験では 52.5mg/日と高反応を示した．その他 Lysine-vasopressin 10μg 負荷に対して ACTH は有意に反応し，ACTH に対して cortisol は正常上限の反応を示した．副腎シンチは両側に集積した．画像診断上明瞭な下垂体腺腫は確認出来なかったが，新大脳外科での Hardy 手術により microadenoma が確認された．

3．Cushing 病9例の手術治療

黒木　瑞雄・田中　隆一
横山　元晴
（新潟大学脳研究所脳神経外科）
谷　長行・伊藤　正毅
（新潟大学医学部第一内科）
土屋　俊明・伊藤　寿介
（新潟大学歯学部歯科放射線科）
宮澤　登
（竹田総合病院脳神経外科）

経蝶形骨洞下垂体手術を施行した Cushing 病9例の経験から，診断および手術に関する問題点につき検討した．9例の内訳は女性5例，男性4例で平均年令は34.1才であった．術前の内分泌検査では通常の Cushing 病と異なり ACTH が持続的低値を保つ例や，デキサメサゾン抑制試験で少量で抑制されたり，また大量でも抑制されない例がみられた．レ線学的検査ではトルコ鞍多断層撮影で4例に変化がみられ，CT では8例に腺腫を直接証明することが可能であった．そのうち microadenoma では6例中で5例が側方に偏在した．中に海綿静脈洞内に腺腫が存在した例があり，術前に腺腫の局在をできるだけ明確にしておくことが重要であると思われた．術後8例に高コーチゾール血症の改善が得られたが，腺腫の extensive resection を加えなかった1例が1年後に再発した．従って手術は腺腫境界部を含めた腺腫の切除が必要であると考えられた．

4．腎不全を合併したアクロメガリィの3例

田崎　和之・鈴木　丈吉
小林　和夫・中山　康夫
（厚生連長岡中央病院内科）

腎不全を合併した末端肥大症を，最近3例経験した．1例目は多発性のう胞腎による慢性腎不全．2例目は軽度の動脈硬化性及び糖尿病性変化のある所へ，脱水と高浸透圧性昏睡が加わったための腎前性腎不全．3例目は腎盂腎炎による1過性の急性腎不全と考えられた．末端肥大症の主要死因として腎不全はなく，また，同症で腎病変を合併するとの報告もないので，腎不全と末端肥大症の間に因果関係があるとは言えないと思われる．しかし，2例目は小脳出血と昏睡をおこして入院す